



センター NEWS

Wakayama
International
Exchange
Center
News

2019年3月発行



和歌山県人ペルー移住110周年記念事業



1899年、佐倉丸に乗った日本人移住者の第1陣がペルーに到着し、その後、和歌山県からペルーへの移住が始まりました。移住から100年以上が経ち、今では6世の時代へとようになってきていますが、今でも和歌山県民の方々は県民歌を大切に歌い、日本の文化を次世代に繋いでいます。移住者の方達は私たち日本人が忘れていない日本人としての大切な価値観を失っていないと同時にペルーの文化も大切にしています。

目次

- P1 和歌山県人移住110周年記念式典出席
- P2 和歌山県人移住110周年記念事業について
- P4 特集：「外国人労働者受け入れ」
- P5 報告とお知らせ for you…
ブラジルとペルーから大学生が来県！

URL : <http://www.wak-kokusai.jp>



～メキシコ・ペルーの中の日本～ 和歌山県国際交流協会 企画員 木村恵子

平成30年10月10日（水）から18日（木）までメキシコとペルーに行ってきました。

以前、和歌山県が実施していた海外技術研修生受入事業や県費留学生受入事業で中南米からの研修生を受け入れていた頃、よく研修生や留学生と交流し、ブラジルをはじめ、メキシコやペルーの国のことや日系人の生活ぶりを聞いていました。また、和歌山県国際交流協会が実施している中南米移住者子弟受入事業で来県する子弟達とも交流する中で日系人社会の変化を感じるようになっていました。

今回、和歌山県からペルーへの移住110周年をお祝いするとともに日系人の歴史や現在の日系人、そしてメキシコ、ペルーの文化を知ること、そして和歌山県国際交流協会のプログラムを体験した子弟との意見交換を行うことなどを目的に訪問することとなりました。

最初の訪問地はメキシコでした。メキシコでは在メキシコ和歌山県人会の木村会長夫妻、そして役員の方々に花束で歓迎していただきました。

メキシコでの滞在では、メキシコ文化を知るためにテオティワカン遺跡やソチムルコを訪問した後、日墨会館において在メキシコ和歌山県人会主催の夕食会が開催されました。



この夕食会に県人会から約60名の日系人が出席され、1分間の黙祷の後、それぞれの代表が挨拶し、歓迎会が始まりました。

私のテーブルにメキシコ和歌山県人会に貢献された津村寿二氏、南加寿子氏が席に着かれており、家族の話やメキシコで日本語を普及された話などを聞かせていただきました。また、メキシコに移住される前、和歌山での生活を懐かしそうに話されていました。

夕食会には、運営に様々な世代の日系人がいました。その中には技術研修生や県費留学生、中南米移住者子弟のOBやOGもいて、久しぶりに再会を果たしました。みんなは当時と変わらず、主婦になっている方や、日本庭園の庭師として働いている方など、懐かしく、お互いの連絡先を交換し、これからも交流をしていこうと約束しました。

翌日は先没者慰霊碑に献花を行い、参拝をおこないました。前日の夕食会で寺本ニコラス元会長の訃報を聞き、寺本氏が会長をされていた時、「次世代に日系人として日本を見てもらいたい」という話をよくされていたことを思い出し、日系人

の方々のメキシコでの生活、日本への思いなどが込み上げてきました。



その後、日墨会館、日本人メキシコ移住あかね記念館を訪問しました。

日本人メキシコ移住あかね記念館は2016年10月15日にオープンしました。メキシコの移住資料館建設は、2012年11月に当資料会館10周年記念シンポジウムにおいて、パンアメリカ





ン日系人協会の春日カルロス名誉会長が発表し、日墨協会設立60周年記念事業の一環として実現しました。記念館の名前は、設立に尽力した春日さんの母親、光子さんの歌人としてのペンネーム「あかね」に由来します。あかね記念館には移住した当時の荷物や資料、和歌山県から移住された津村義就夫妻の写真などが展示されていました。

メキシコの日系人の方々は、日系人の歴史を大切に次世代に繋いでいくことと、子弟達に日本語教育及び日本文化の継承にも力を注いでいました。1944年に設立された中央学園には多くの日系人の子弟が日本語や日本文化を学び、現在ではメキシコ人子弟も受け入れています。また、児童向けの日本語教育以外にも、成人向けの日本語コースも設けたことで、中央学園は二国間の文化理解と絆を強化するメキシコで最も古い日本語学校となっています。





ここでいっぴく！
メキシコのお料理紹介



チャプリネス

メキシコにも昆虫食文化があり、今回、チャプリネスというバッタ、エスカモーレという蟻の卵をトルティーヤに巻いて食べました。赤か緑のチレをかけて自分の好きな辛さにします。ほかにもトルティーヤにはお肉や野菜を巻いて食べました。

10月12日（金）メキシコを出発してペルーへ

リマ空港到着後、ネッタ会長夫妻、斎藤カルロス元会長、坂田ソニア婦人部長、小阪リカルド顧問に出迎えていただきました。翌日、昼食会を兼ねて2019年に開催予定の「和歌山県人会世界大会」についてペルー、ブラジル、メキシコ県人会の会長と意見交換会を行いました。また、堀事務局長とペルーから子弟受入事業で和歌山県に派遣されたアレハンドロ・カランサ君と子弟受入事業について意見交換もしました。また、この昼食会に出席していたブラジル県人会の婦人会のメンバーと技術研修生として和歌山県で過ごした思い出話やその時代の担当者のことなどで話が弾みました。



その後、ペルー日系人協会を訪問し、エドゥワルド・ヤワラ・モリシタペルー日系人協会会長をはじめ斎藤カルロス元ペルー和歌山県人会会長などに温かく迎えていただきました。当日はペルー日系人協会主催で、日本文化イベントが開催されていました。ペルー日系人協会が中心となり日本伝統文化・武道の継承、日本語教育の充実など図っていることがうかがえました。

そして、日系人協会の日本庭園をまわり、ペルー日本人移住資料館「平岡千代照」を訪問し、館長の説明で館内を視察しました。館内を見学していると斎藤カルロス元会長から「第二次世界大戦中の日系人は「勝ち組」と「負け組」とが衝突して大変だった」と資料館を見学するだけではうかがえないお話を聞かせていただきました。



そして、いよいよ和歌山県人ペルー移住110周年記念式典・祝賀会の会場へ移動し、記念式典が始まりました。この記念式典にはブラジル県人会の谷口会長と婦人会のメンバー、メキシコから木村会長夫妻が出席され、盛大に開催されました。

記念式典はペルーの国歌斉唱の後、日本国歌、続いて和歌山県民歌を、声をそろえて一斉に歌いました。

そして、ネッタ・ボネリ・デ・サトウ会長の挨拶、来賓等が祝辞を述べ、記念品の交換となりました。和歌山県国際交流協会からは110周年を祝して和歌山県を代

表する陶芸家、目黒威徳氏の作品を記念品として贈呈したところ、ペルー和歌山県人会から記念品として「トリトデプカラ」を返礼品としていただきました。

記念式典が終了後、アルフレッド・サカタ氏の乾杯で祝賀会が始まりました。ペルー料理といえばセビーチェ。冷たいセビーチェと温かいセビーチェでもてなしてくれました。また、フロリダのショーにも出演している女性が中心となって歌やマリネラダンスを披露してくれました。同じテーブルにブラジル県人会の婦人会の方々が座っており、いろいろお話をしていくと和歌山県からJICAプログラムの日系シニアボランティアで派遣されていた幡井妙子OG隊員と彼女が派遣されていた2年間、様々な県人会活動を一緒に行ってきたということがわかり、話がとても盛り上がりました。祝賀会はショーとともに華やかに時間が過ぎていきました。



この記念式典には、和歌山県が実施していた和歌山県技術研修生受入事業、県費留学生受入事業で参加していた方々も県人会のお手伝いをしていて、何十年ぶりに再会し、みんなは当時と変わらず、思い出話に花が咲きました。



ペルーではほかにペルー日系人協会クスコ支部を訪問しました。この支部は愛気文化センターも兼ねており、非日系人も日本語を学習する場となっています。ここにはJICA海外協力隊も日本語教師の職種で入っており、日本語のN5、N4のレベルを指導しているとのことでした。学習者達は日本語を学習して、観光ガイドになりたいとの目標もあり、ペルーを訪問する日本人に自国を紹介していきたいと意欲を話していました。

最後に、日系人社会も世代交代が進む中で、日本にルーツをもっているからというだけで日本文化を継承されるものではないと感じました。生活環境によって人は自国の文化を忘れてしまうこともあるかと思えます。その中でメキシコ、ペルーの日系人の方々は日本文化を継承するために日本語を学習する場、日系人達が集まれる場、さらに日系人の移住した歴史を忘れないための場をつくり、優秀な人材を日本に留学させるなど次世代への継承を続けています。続けることの大切さ。自分が今まで聞いてきた日系社会よりも実際、見たことで更に、私たち日本人が忘れかけている日本人としての誇りや使命感を日系人は持っていることを強く感じました。メキシコやペルーには日本の心が息づいていました。

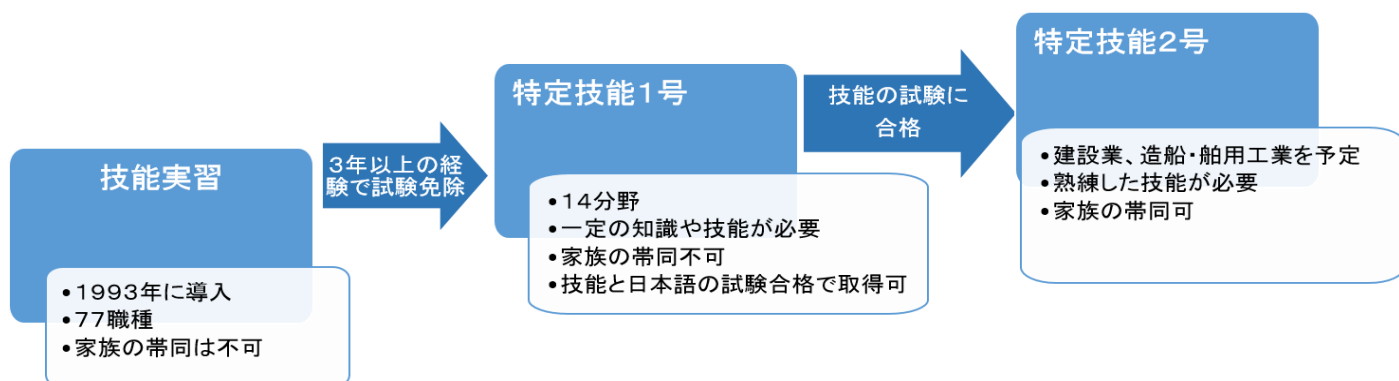
特集：「外国人労働者受け入れ」のための新制度が始まります。

国内の人手不足の深刻化を踏まえ、人材確保が困難な産業分野で外国人労働者を受け入れるために、平成30年12月8日、「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」が成立し、新たな在留資格「特定技能1号・2号」が平成31年4月に施行されます。

「特定技能1号」は介護や建設など、14分野において一定の知識や技能が必要な仕事に就く外国人を対象とした在留資格で、最長5年の滞在が認められますが、家族の帯同は認められていません。

14分野：介護、ビルクリーニング、素形材産業、産業機械製造業、電気・電子情報関連産業、建設、造船・船用工業、自動車整備、航空、宿泊、農業、漁業、飲食料品製造業、外食業

「特定技能2号」取得には「特定技能1号」よりも難しい技能試験に合格する必要があり、現時点で14分野のうち「建設」、「造船・船用工業」の分野での受入が検討されています。この在留資格は在留期間の更新が可能で、家族の帯同も認められています。



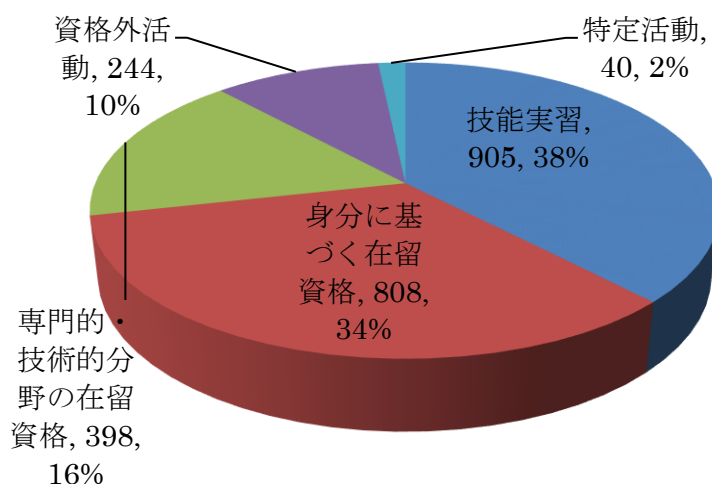
政府は「特定技能1号」の14分野で5年間、54万5千人の受入を見込んでいます。「特定技能1号」対象者には、当然ながら一定の技能・日本語能力水準が求められます。平成30年6月末現在で28万5千人を超える「技能実習生」については、3年以上の実習経験があれば、試験が免除となるため、「技能実習生」から「特定技能1号」への移行者が全体の約45%を占めると政府は想定しています。

和歌山県においても人手不足は深刻で、厚生労働省和歌山県労働局が発表した昨年10月末現在の県内の外国人雇用状況によると、県内の外国人労働者は2,395人で、前年同期比で135人（6.0%）増加しており、外国人労働者数は4年連続で過去最高を更新しています。

国籍別の状況では、中国が631人で最も多く、次いでフィリピン、ベトナム、インドネシア、タイの順となっています。

在留資格別の状況を見ると「技能実習」が全体の約38%を占め、割合も3年連続で増加しています。

こうしたことから、新制度の導入に伴い、今後とも外国人労働者、ひいては、在留外国人もますます増加していくことが予想されます。多文化共生の実現に向け、同じ地域社会の構成員としての外国人に対し、多言語での情報提供や、相談体制のさらなる充実を目指していきたいと考えています。



ブラジルとペルーから和歌山県人会の子弟2名が来県しました！



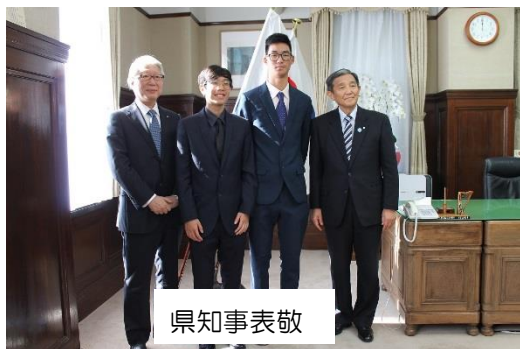
いながききえい
稲垣喜栄さん（日系2世）
出身：ペルー リマ市
ルーツ：曾祖父が日高町出



うじたかんじ
宇治田鑑至さん（日系4世）
出身：ブラジル パラナ州
ルーツ：父が和歌山市出身

和歌山県からは、北中南米に多くの方が移住し、現在でも現地には多数の県人会があります。和歌山県国際交流センターでは、中南米に移住した県人の子弟を県内の一般家庭に受け入れ、家庭生活を通じて日本の風俗・習慣を理解してもらうとともに、帰国後は、日本の青少年との継続的な交流を通じて、将来にわたって県人会活動の維持・発展に資することを目的に、平成21年度から「中南米海外移住者子弟受入事業」を実施しています。

今年度はペルーとブラジル両国県人会から、それぞれ稲垣喜栄さんと宇治田鑑至さんを約3週間迎え入れ、ホームステイを体験しながら、県知事・県議会表敬、理事長主催食事会、和歌山大学学生との交流、柔道体験、グローバルセミナーでのプレゼンテーション等において実に多くの方々と活発に交流を図りました。



県知事表敬



柔道体験



紀南でのホームステイ家族



グローバルセミナー



ホームステイ家族による見送り

◎公益財団法人和歌山県国際交流協会（WIXAS）は賛助会員を募集しています。

和歌山県内の各分野での国際交流活動、国際相互理解及び国際協力を促進するとともに、在住外国人への支援を推進しています。ことば、民族、国境を越えて誰にでも開かれた地域社会づくりを図り、ひいては国際社会の平和と発展に寄与することを目的に活動しています。

ぜひ当協会の活動にご賛同ください。

《賛助会員》会費3,000円/年

★特典★：イベントのご案内/情報誌の配布

〒640-8319

和歌山市手平 2-1-2 和歌山ビッグ愛 8F

TEL：073-435-5240 / 073-423-5717

FAX：073-435-5243

和歌山県国際交流センター
〒640-8319

和歌山市手平 2-1-2

和歌山ビッグ愛 8F

TEL：073-435-5240

FAX：073-435-5243

開館時間：

水曜日・祝日を除く

毎日 10:00～18:30

URL：

<http://www.wak-kokusai.jp>

